

ひとを育てる活動

電気を引いて テレビ教材を活用したい

「とりあえず学ぶ場」から「質の高い教育」をめざして

1年生まで受け入れ可能な教室増築事業ほか、「安全な通学のため、家の近くで学ばせたい」の要望に応じて、低学年児童の各種教育拡充支援をしてきたILS/先住民族学校。今年度最初の支援要請は「電気を引いてテレビ教材を活用したい」でした。テレビはすでに、セブ湖畔のレストラン「プンタ・イスラ」から寄贈されたということです。

公立やSCMSIの小学校ではすでにテレビ活用で学力向上を図っている中、2年生になれば、タクネル村中心部の公立小に編入することになる先住民族学校の子どもたち。公立と同じように早めにテレビ視聴の機会をとということでした。

辺境におけるビデオ使用には、ソーラーパネル設置という選択もあり、私たちもかつてPFPと協働のブラクール小学校で、小型のソーラー支援をした経験があります。しかし、ティヌオス村の場合は、すでに一部の住民や教師住宅に電気が来ているとのこと。環境への負荷問題を別にすれば、ソーラーパネル新設よりは、電線を延伸した方が安価のようで、経費は1.8万ペソ(約45,000円)とのこと。すでに現地に提示の予算案には含めなかった「電気を引く」について、今後検討したいと思います。

なお、上記レストランからは毎年クリスマスギフトも届くとのこと。マリスタ修道会「黙想の家」を含めて、レイクセブ内にILS応援団がいることは大変心強く思います。私たちもこの1年、引き続き環境保全や自主財源創出事業を応援し、アニータ先生が特に気にかけている両親がろうあ者(写真右)である子どもを含めて、今後も安心して学べる支援ができればと考えています。



両親ともにろうあ者でビーズのロザリオ作りで生計を立てる

前年比10%支援増額します

1980年以降43年目に入ったSCMSI校支援

前号で触れたガンダム副学長からの「支援を増やして！」の要望に対して、一時停止した学校運営費等の全体支援を復活させました。創立の理念「チボリ民族の伝統継承」を守りながら、近隣の非先住民族の子弟も受け入れ、初等から高等教育までの総合教育機関となったSCMSI。これまでも触れたように、私学への補助金や奨学金等の政府資金も入って、運営面では自立を達成と評価して支援を減らしてきました。しかし、3年に渡るコロナによる観光産業の衰退と1年を超えて続くウクライナ紛争による電気代ほか諸物価の値上がりで運営費が急増し、支援増額の要請となりました。

幸いコロナ問題は収束が近いとされています。レイクセブ町の観光産業が息を吹き返せば、ホテルや土産物店で働く父母やハンディクラフト販売の母親たちの収入増加、授業料納入率上昇につながると期待しています。

新規受け入れ取りやめで 10名に減ります

CMIP経由ハイスクール奨学生支援事業

法人としての活動収束を前に、新規採用は無しと伝えていたCMIPと協働の奨学生支援事業。前年度13名だったハイスクール生については、この5月末に3名が卒業、新入学の7年生はいなくて、8から12年生までの計10名になります。当団体の厳しい収支状況を考えれば、支援対象が減るのは歓迎すべきことですが、以前、CMIP事務局のチャリスさんに、奨学生モニターやその報告作業の労苦に感謝を伝えるとともに、奨学金の額が些少である点に触れた時、「月額500ペソ/1,200円は貴重です！」と即座に返信があったことを思い出しました。

生徒の大多数は辺境に住んでいて、町の中心部の学校までは遠く、4人で一部屋を借りる、乗合バスや相乗りオートバイで通うなど、それぞれに経費がかかり、奨学金があればこそ、ジュニア4年、シニア2年の中等教育を終了できますという奨学金の意義、感謝が伝えられました。

P1でも最後に触れたように、特に教育に関しては、NPO法人としての活動収束後も、学業を終えるまでの奨学金支援等のニーズに応える方途を考えたいと思います。

教員国家試験/LET挑戦者の支援

「卒業予定は4名、残る4名の支援どうぞよろしく」4月初めにCMIPのチャリスから届いた奨学生報告。カレッジ生も新規受入停止を伝えてあり、今年は4名と最小限になります。一方、卒業生の国家試験への挑戦は継続支援の予定で、1年前の卒業生ジェーンについて要請がありました。公立校教師への道、超難関LET合格を目指して頑張してほしいと思います。



卒業後の1年間、辺境にあるCMIPパンリ小で見習い教師を務め、今年LETに挑戦のジェーン

最終年度の奨学金 満額の月額3000ペソに

TBA経由で支援のあしながカレッジ奨学生アルマ

ボルールの住民組合TBA経由で支援のあしながカレッジ奨学金。すでに報告のように、この奨学金は元FOT会員によるブラクール出身のカレッジ生向けでした。支援終了後、対象をビラーン等にも広げ、その管理もPFPのビビアンさんが他界したのち、TBAのボニファシオに引き継がれました。しかし、残念ながらすでに2名が中退。資金繰り問題に加え、多忙なボニファシオの管理能力も考慮し、1年前に採用のアルマについては、定額の約7割、月2000ペソとしました。

3年次修了を控えた4月初め、「いい成績で4年に進級予定です。卒業期の経費増もあり、できれば満額を」の手紙が届きました。人生経験を積み、学業再開組のジュネッフェとアルマ。今年度末、2人そろっての卒業に期待しています。